中国における『金剛頂経』伝承
――『略出経』を中心として――

乾　仁志

一　はじめに

『真実摂経』を「金剛頂経」と呼ぶのは中国・日本で展開されたもので、その場合「金剛頂経」という呼称は『真実摂経』に限らず、広く金剛頂経系の経軌を指す言葉でもある。「金剛頂経」という名の伝承は、金剛智三蔵によって中国に齎され、不空三蔵によって受け継がれて展開した。「金剛頂経」の伝承に関して、両三蔵ともに広本の存在を伝えているが、金剛智三蔵がたんに十万偈とするのに対し、不空三蔵は十八会十万偈として、十八種の聖典群からなる叢書的性格をもつものとした。それゆえ「金剛頂経」というのは広義の意味で用いるのが本来である。[1]

漢訳の密教経軌には「金剛頂」の名称を冠したものが多く存在するが、そのほとんどは金剛智訳と不空訳で占められている。その中、とくに『真実摂経』は、不空三蔵の『金剛頂瑜伽経十八会指帰』[2]（以下『十八会指帰』と略す）において、十八会中の初会に位置付けられたことから「初会の金剛頂経」と呼ばれているが、またたんに「金剛頂経」と呼ぶ場合にも、狭義の意味では一般に『真実摂経』を指す場合が多い。このように『真実摂経』は十八会あると伝えられる「金剛頂経」の中でも最も中心的な位置にあり、また事実「金剛頂経」の伝承自体も、とくに『真実摂経』と結び付けて伝えられてきた。ところが「金剛頂」という名は、広本に由来するとはいえ、漢訳に付された冠名以外『真実摂経』の本文には直接見出すことができない。

そこで以下本稿では、「金剛頂経」の伝承を最初に中国に将来した金剛智三蔵の訳経に立ち返って、『真実摂経』が「金剛頂経」と呼ばれるにいたった経緯、および「金剛頂経」の名の由来について考察したいと思う。

二　金剛智三蔵の伝えた「金剛頂経」

『真実摂経』には、サンスクリット原典、チベット訳、漢訳という三種の資料が存在する。サンスクリット原典とチベット訳は完成本で[3]、両資料から確認できる経題は「一切如来の真実を摂めたものと名付ける大乗経典」（Sarvatathāgatatattvasaṃgraha nāma mahāyānasūtra）である。詳しくは『一切如来真実摂経』といい、略して『真実摂経』と呼ぶのが正式である。漢訳には、不空訳『金剛頂一切如来真実摂大乗現証大教王経』三巻と、施護訳『仏説一切如来真実摂大乗現証三昧大教王経』三十巻の二本があり[4]、両書ともに『真実摂経』の正式名に「大乗現証（三昧）大教王」という金剛界品の名を加えているのが特徴である[5]。また不空訳には「金剛頂」という冠名が付加されており、とくにこの点が施護訳ならびにサンスクリット原典やチベット訳と異なっている。不空訳は八世紀中頃に訳出されたものであるが、内容は金剛界品の第一章にある金剛界大曼荼羅儀軌分に相当する部分訳である。それに対し、施護訳は十一世紀初頭の訳出で、サンスクリット原典や同じ十一世紀ごろに訳出されたチベット訳によく対応する完成本の全訳である。施護訳ならびにチベット訳の翻訳が不空訳に比して年代が下るとはいえ、これらの経題から見て、『真実摂経』を「金剛頂経」と呼ぶ慣習がインドで定着していたとは考えられない。また不空三蔵（七〇五～七七四年）がスリランカ・南インドに渡られた当時、そこで『真実摂経』をはじめとする一群の瑜伽経軌が「金剛頂経」の名で呼ばれていたかどうかは明かでない。むしろ「金剛頂経」という名そのものは、師である金剛智三蔵の伝承を引き継いだところから展開されたと考えられる。それゆえ『真実摂経』が「金剛頂経」と呼ばれるにいたった経緯については、金剛智三蔵に遡って考察されなければならない。

先ず金剛智三蔵（六七一～七四一年）の訳経の全般について簡単に触れておきたい。伝記によれば[6]、金剛智三蔵は三十一歳の時に、南インドで龍智菩薩に就いて「金剛頂瑜伽経」、「毘盧遮那総持陀羅尼門」などの密教経典を学び、その後、海路を経て中国に渡り、開元七年（七一九年）に西京の長安に入ったと言われる。そしてその後、金剛智三蔵は資聖寺に住して、開元一一年（七二三年）よりインド将来の密教経典の翻訳に着手する。三蔵生前の開元一八年（七三〇年）に編集された智昇撰『開元釈教録』（以下『開元録』と略す）巻第九[7]には、三蔵の訳経として、『七倶胝仏母准泥大明陀羅尼経』一巻、『金剛頂瑜伽中略出念誦法』四巻、『金剛頂経曼殊室利菩薩五字心陀羅尼品』一巻、『観自在如意輪菩薩瑜伽法要』一巻の四部七巻の経軌があげられている。また三蔵没後の貞元一〇年（七九四年）に編集された円照集『大唐貞元続開元釈教録』（以下『続

開元録』と略す）上巻と、[8]貞元一六年（八〇〇年）に編集された円照撰『貞元新定釈教目録』（以下『貞元録』と略す）巻十四には、[9]開元一九年（七三一年）以後の金剛智三蔵の訳経として、『金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』一巻、『千手千眼観世音菩薩大身呪本』一巻、『千手千眼観自在菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼呪本』一巻、『不動使者陀羅尼秘密法』一巻の四部四巻の経軌が加えられている。以上の八部十一巻は三蔵の訳経として信頼性の高いものであろう。その外、『大正新脩大蔵経』には、さらに十六部の経軌が金剛智三蔵の訳経として収録されている。[10]これら十六部の経軌すべてを金剛智三蔵の真訳とするには問題が残るにしても一応考慮しなければならない。そこで『大正蔵経』にあげられている二十四部の経軌のうちから「金剛頂」の名が冠されているもの、ならびに本文に「金剛頂経」という名が出ているものを拾い出してみると、次の七経軌[11]のあることが分かる。

(1)　金剛頂瑜伽理趣般若経、一巻
(2)　金剛頂瑜伽中略出念誦経、四巻
(3)　金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法、一巻
(4)　金剛頂経瑜伽観自在王如来修行法、一巻
(5)　観自在如意輪菩薩瑜伽法要、一巻
(6)　金剛頂瑜伽青頸大悲王観自在念誦儀軌、一巻
(7)　金剛頂経曼殊室利菩薩五字心陀羅尼品、一巻

その他、『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』[12]二巻も「金剛頂経」として考慮しなければならないが、経名としての「金剛頂経」に触れられていないので除外しておく。そこで先ず内容に関して言えば、(1)は『十八会指帰』にいう第六会の『理趣経』の類本の一つにあげられているものである。また(2)は『真実摂経』に対応するもので、その他(3)より(7)は各尊格の成就法を主とする儀軌である。そのうち(7)は前半の冒頭に、『十八会指帰』にいう第四会の『降三世儀軌』の一節と見られる文が付加されている。[13]また(2)より(7)は、いわゆる行法次第として金剛界法の要素をもつ。次に経題に関して言えば、「金剛頂瑜伽」、「金剛頂経瑜伽」、「金剛頂経」と冠したものがあり、「金剛頂瑜伽」と冠したものが多いことがわかる。また本文の中で「金剛頂経」の名について触れられているのは(2)より(6)までで、それぞれ次のように出ている。

(2)には「我今於百千頌中金剛頂大瑜伽教王中、為修瑜伽者成就瑜伽法故、略説一切如来所摂真実最勝秘密之法」
(3)には「我依瑜伽最勝法、開示如実修行処」
(4)には「我今依金剛頂経、演金剛蓮華達摩法要」
(5)には「我今順瑜伽、金剛頂経説、摩尼蓮花部、如意念誦法」
(6)には「我依金剛頂瑜伽経、演説観自在王如来修行蓮花達磨法要」

ただし(3)には「金剛頂」という語そのものはないが、それぞれ「百千頌金剛頂大瑜伽教王」、「金剛頂経」、「瑜伽金剛頂経」、「金剛頂瑜伽経」、あるいは「瑜伽最勝法」に依存していることを伝えている。

ところでこれら七経軌の中で、(2)と(5)と(7)は金剛智三蔵の訳経として『開元録』にあげられ、(3)もその後『続開元録』、『貞元録』において補充されているので信頼できるとしても、(1)と(4)と(6)はそれらの訳経録にはあがっていないため、金剛智訳とすることに関して確証がなく、いずれも疑問視されているものである。[14] それゆえ、(1)と(4)と(6)の三経軌を一応除外すると、いわゆる金剛界法に含まれる儀軌内容は別にして、本文中で「金剛頂経」に触れているは(2)と(5)に限定されることになる。しかも疑問視されているものを含めても、「百千頌」すなわち十万偈と伝える(2)の文以外に「金剛頂経」について具体的に言及している箇所は見られない。そこで、ここでは当面の資料として(2)の文にしぼり、金剛智三蔵の伝承した「金剛頂経」についてもう少し検討しておきたい。なおこれらの訳経からみて、不空三蔵の『十八会指帰』にいう初会、第四会に関係するものが存在し、また疑問視されているものを含めると第六会も加えられるように、金剛智三蔵の伝えた「金剛頂経」が初会の『真実摂経』に限定されないものである点は考慮されてよいであろう。

さて金剛智訳『金剛頂瑜伽中略出念誦法』四巻（以下『略出経』と略す）は『大正蔵経』などでは「経」と結ばれているが、中国で編集された前記の訳経録では「法」とあり、内容から見ても「念誦法」とするのが本来であったと推定される。本文はとくに『真実摂経』の金剛界品からの引用文を多く含み、実質的にそれらの内容を中心に編集していると言える。このように内容の多くが『真実摂経』に依存している一方で、前述したように『略出経』の基盤は十万偈の「金剛頂経」にあると伝えているのである。しかし金剛智三蔵はこの十万偈の「金剛頂経」についてそれ以上くわしく語っていない。

この金剛智三蔵の伝えた「金剛頂経」については、『金剛頂経大瑜伽秘密心地法門義訣』（以下『義訣』と略す）に少しくわしい伝承が残されている。『略出経』には四巻本のほかに六巻本の異本があると言われていたが、その六巻本の転写本も最近発見され内容も公表されている。[15]『義訣』は四巻本ではなくこの六巻本に対する注釈書で、一説に金剛智三蔵が口述したものを不空三蔵が筆記したものと言われている。もと三巻あったと伝えられているが、現在は上巻しか存在しない。弘法大師によって将来されているので、[16]それ以前の成立であることが知られる。そこで『略出経』を検討する前に、この『義訣』の伝える「金剛頂経」の伝承について見ておきたい。

『義訣』[17]では、金剛智三蔵が来唐の時に所持していた「金剛頂経」には、百千頌の広本とその略本があったとしている。すなわち南天竺界の鉄塔の中に無量頌の大経本があり、仏滅後数百年して、中天竺国の仏法が漸く衰えた時に、ある大徳がその鉄塔内に入り、この経を諸仏菩薩の指授を受けて記憶し、出塔の後に書写したのが百千頌の広本「金剛頂経」であったという。そして後に三蔵はこの百千頌の広本を伝え受けたが、その広本は三蔵が中国に将来する途中、海上にあって暴風雨に遭い、不幸にして沈没をおそれた船主たちによって海中に投棄され、そのため略本のみが残ったのであるという。金剛智三蔵の伝えた「金剛頂経」には、百千頌すなわち十万偈から成る広本が存在したが、実際に中国に将来できたのはその略本であったという訳である。しかしその略本が『略出経』のもとになったものであるとしても、その略本が具体的に何を指すかは『義訣』の文からは確認しえない。この『義訣』の伝える伝承は、後に海雲が大和八年（八三四年）に著した『両部大法相承師資付法記』（以下『付法記』）にも引かれているが、ここでは、

「此経梵本十万偈、略本四千偈、広本則有無量百千倶胝那庾多微塵数偈、如金剛頂義訣中説……金剛界大教王広梵本経、則知此経広本有無量百千倶胝那庾多微塵数偈……即如金剛頂経梵夾経、略本四千偈、中本十万偈、広本則有無量百千倶胝那庾多微塵数偈」[18]

と記し、無量偈の広本、十万偈の中本に対して、略本を四千偈と規定している。ただしここで略本の分量を四千偈と規定するのは、不空三蔵の『十八会指帰』の末文に出る「瑜伽教十八会、或四千頌、或五千頌、或七千頌、都成十万頌」[19]に依ったものとも考えられる。『十八会指帰』の四千頌が何を指すのかは不明であるが、施護訳の末文には梵本は四千頌であるとしているから[20]『真実摂経』も含まれうる。それゆえ『付法記』の略本は、あるいは『真実摂経』を指している可能性もある。しかし、『義訣』の伝承については疑わしい点もある。とくに広本の海中投棄説は他の確実な史料に出ていないことから、その信憑性について否定的にみる見解がある。また『義訣』の撰述者について『開元録』や『貞元録』

に金剛智三蔵や不空三蔵の訳経としてあげられていないため、これについても疑問視されている。[21] それゆえ金剛智三蔵の伝えた「金剛頂経」について、今のところ『義訣』や『付法記』をもってしては明言することはできないのである。

では『略出経』自体にはどのように説かれているのか、前出の冒頭文について検討したい。四巻本には次のように述べられている。

「我れ今、百千頌の中、金剛頂大瑜伽教王の中に於て、瑜伽を修する者が瑜伽の法を成就せんが為の故に、略して一切如来所摂真実の最勝秘密の法を説かん。[22]」

また参考までに六巻本の文を示すと、ほぼ同様につぎのようにある。

「我れ今、百千頌の金剛頂大瑜伽教王の中に於て、瑜伽の法を成就せんが為の故に、略して一切如来所摂真実の秘密法要を説かん。[23]」

これらの文の意味するところは、「十万頌の金剛頂大瑜伽教王」というものがあって、それより略出したものが「一切如来所摂真実の最勝秘密の法」あるいは「一切如来所摂真実の秘密法要」であるということであり、経題の「金剛頂瑜伽の中より略出せる念誦経」は、この意趣を反映したものであることがわかる。つまりここで言う「一切如来所摂真実の最勝秘密の法」あるいは「一切如来所摂真実の秘密法要」が『略出経』にあたる訳である。ところで「一切如来所摂真実」という名は『真実摂経』の経題に由来する。事実『略出経』は『真実摂経』と対応する箇所が多く、可なりの部分がそれに基づいている。従って、『略出経』は、実質的には『真実摂経』に説く最勝秘密法を明かしたものとも予想される。しかし『略出経』自身は、「金剛頂経」を基盤としていることを明記している。

では『略出経』において「金剛頂経」と『真実摂経』はどのような関係に置かれているのであろうか。『略出経』には広本・略本という名称を見出すことはできない。しかしその史実性はさておき、経題やいまの文には「金剛頂経」の広本の存在を予想せしむるものがあることは否定できない。『略出経』自身の述べるところにおいて、基本的にはやはり「金剛頂経」を『真実摂経』よりも広い概念を持つものとして位置付けていると同時に、『真実摂経』をその広本の中核にしていると考えられるのである。その意味で、広本と略本があったとする『義訣』の伝承も『略出経』に基いている可能性がある。そこで以下に『略出経』の性格を検討し、「金剛頂経」の名の由来について考察したい。

三　『略出経』の性格

『略出経』の内容は、ほぼ本尊瑜伽を説いた成就法と、曼荼羅造壇法と、入壇灌頂法という主要な三要素からなっている。この修法の次第は基本的には『真実摂経』の内容とも一致している。[24] しかし『略出経』は、前の冒頭文にあるように、瑜伽者がどのようにして本尊（金剛界曼荼羅）に瑜伽するのか、その修法上の法軌を説いたものである。それゆえ仏の立場から説かれた「如是我聞」で始まる経形式の『真実摂経』とは立場が異なり、内容構成の上でも相違が生じてくる。

『略出経』と『真実摂経』の対応関係を見ると、『略出経』は『真実摂経』の四大品の中では金剛界品と対応する箇所が多く存在する。その他、降三世品、遍調伏品の一部や、さらに教理分（続タントラ）にも一部対応している。また金剛界品には、いわゆる大・三昧耶・法・羯磨・四印・一印という六種の曼荼羅儀軌が説かれているが、その中でも特に最初に説かれる大曼荼羅儀軌分に対応するところが圧倒的に多い。[25] これらの事実から『略出経』の内容は、基本的に『真実摂経』の金剛界品中の金剛界大曼荼羅儀軌分と同様の性格を持つものであることがわかる。ただし『真実摂経』所説の曼荼羅で言えば、確かに秘密曼荼羅（いわゆる三昧耶曼荼羅）も説かれている。[26]『略出経』の曼荼羅造壇法を説いた箇所には、尊首者を画く大曼荼羅に続いて、印を画く法として三昧耶曼荼羅が説かれ、さらに「金剛界摩訶薩等の呪を抄画して、各本位の上に置くべし。此等は是れ自の語言の印なり」[27] として、各尊格の語言の印が説かれている。これらは字印形、種三尊という身口意の三密瑜伽に対比されるものであるが、灌頂儀礼において用いられる曼荼羅に関するもので、曼荼羅作製上の実際の問題も含まれている。たとえば「金剛阿闍梨は、迷乱の心無きを以て、応に諸の尊首者を画くべし。若し力の能く画く可き者無ければ、即ち種種の綵色を以て、各おの其の部印を画き、勝具功徳者の尊首を、皆悉く之を置け」[28] とあるように、色粉では各尊格の像容は画きがたいことも一つの理由としてあったであろう。そのためか、実際に灌頂儀礼においては三昧耶曼荼羅を用いる場合が多いようである。またさらに各尊格の尊名や種字をも代用することもあったことがこれによって知られる。[29] それゆえ『略出経』が大曼荼羅を根幹としていることに変わりはないのである。

では『略出経』が成立する上で依用された『真実摂経』とは、現存の完成本に比してどの程度の形成段階にあったものであろうか。しかしこれについては明確なことは言えない。『略出経』自体は金剛界大曼荼羅儀軌としての性格をもつ。ただし『略出経』は瑜伽者のための念誦法で

あるから、必要に応じて金剛界品の最初にある金剛界大曼荼羅儀軌分以外の要素も取り入れていると思われる。しかしこれらは全体から見て、さほど多いというわけではない。そこで『略出経』と類似した性格をもつものとして、インド・チベットの金剛界曼荼羅儀軌の基本書であるアーナンダガルバ（Ānandagarbha）の『金剛出現』と対比しておきたい。

『金剛出現』[30]は具には「金剛界大曼荼羅儀軌・一切金剛出現と名付けるもの」（Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā Sarvavajrodaya nāma 以下『金剛出現』と略す）と言う。また奥書には、

「具吉祥聖なる一切如来真実摂・大乗現証の大タントラ王より略出せる金剛界大曼荼羅儀軌・一切金剛出現と名付けるものを終わる」

（śrīmadārya-Sarvatathāgatatattvasaṃgrahād Mahāyānābhisamayād mahātantrarājād uddhṛtā Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā Sarvavajrodaya nāma samāptaḥ）

とあり、『金剛出現』は金剛界大曼荼羅儀軌で、それが『真実摂経』の金剛界品を拠り所としていることが記されている。このように『金剛出現』は『略出経』と共通した性格をもっていることが窺える。[31]しかも実際の儀軌内容は、本尊瑜伽を説いた成就法と、曼荼羅造壇法と、入壇灌頂法という三要素からなり、基本的な構成も『略出経』と同じである。ただし、それぞれの構成要素には相違する点も少なくない。どちらかと言えば、『金剛出現』の方がより洗練された構成になっていると言えなくもない。時代的にもアーナンダガルバは金剛智三蔵より下る可能性がある。[32]それゆえ両書を一律に取り扱うことができないにしても、『略出経』が金剛智三蔵当時のインドの伝統を伝えていることは間違いないであろう。

さてアーナンダガルバは『真実摂経』の全文に対する注釈も著している。プトン（Bu ston 一二九〇～一三六四年）の『瑜伽タントラの海に入る船』[33]（Rnal ḥbyor gru gzins）によれば、アーナンダガルバは先ず金剛界品の大曼荼羅儀軌として『金剛出現』を著し、次いで降三世品の大曼荼羅儀軌として『降三世出現』[34]（Trailokyavijayodaya）を著し、次いで『真実摂経』の全文に対する注釈『真実光作』[35]（Tattvālokakarī）を著して、その中に遍調伏品・一切義成就品の両曼荼羅儀軌をも説かれたのであると言う。『真実摂経』には金剛界品をはじめ各四大品に六曼荼羅儀軌が説かれているが、降三世品には教勅の四曼荼羅儀軌が付加されているので、総計二十八曼荼羅儀軌が説かれていることになる。しかしアーナンダガルバの著作から知られるように、インドにおいて、それらのすべてを独立に再編成して瑜伽者のために法軌を作成することはほとんどなく、しかも実際に灌頂儀礼を執行する場合においてすら、それらのすべてを行うことはなかったと推測される。つまり『真実摂経』を構成する各四

大品の基本がそれぞれ最初に説かれる大曼荼羅にあるため、大曼荼羅の法軌を説示することで、基本的な瑜伽法と灌頂儀礼は明らかにされうるからである。その意味でも『略出経』は『金剛出現』と同様に、金剛界品を代表する大曼荼羅儀軌の性格を持っていると言うことができる。ただしその場合、金剛智三蔵が基いたと想定される原典が、サンスクリット原典・チベット訳・施護訳という現存の完成本に比してどの程度成立していたものかは、『略出経』によって俄かに判断できない。[36] アーナンダガルバの場合は『真実摂経』全文に対する注釈書も著しているから、『金剛出現』が著された当時すでに完成本が成立していたことは明らかである。しかし両書の比較から、『略出経』が依用したと思われる『真実摂経』も形成過程にあったのではなく、すでに完成形態にあった可能性も否定することはできないであろう。

この様に『略出経』と『金剛出現』はともに『真実摂経』の金剛界品を重要な拠り所としている。ところが『略出経』の場合は、経題や本文に見られたように、それ自身が明記する所依とする立場は、あくまで「金剛頂瑜伽」であり、「十万頌の金剛頂大瑜伽教王」である。では十万偈の「金剛頂経」と『真実摂経』とは如何なる関係にあるのであろうか。『義訣』は「金剛頂経」に広本と略本があるとするが、前述したように、その場合の略本が『真実摂経』を指すかどうか明確でない。また『略出経』においても、広本は推定されるとしても、『真実摂経』がその略本であるとは明言していない。

金剛智三蔵の伝える「金剛頂経」と『真実摂経』の関係を見る場合、次の点に留意しておく必要がある。その第一は、『真実摂経』の本文には「金剛頂」という用語が見出せないということである。第二は、後に四千偈とされる『真実摂経』が十万偈の広本からの略本ならば、広本に対する略本であるということに関して『真実摂経』自体に何等かの記述があってよいのに、そう言った記述がまったくないということである。第三は、先の訳経の例に見たように、金剛智三蔵の伝えた「金剛頂経」が初会の『真実摂経』のみに限定されていないということである。第四は、第三の点と同様のことが『略出経』自体にも当てはまり、『真実摂経』を主要な拠り所としつつも、『真実摂経』には見られない他の要素も含んでいるということである。これら四点のうち、第一と第二の点は、「金剛頂経」の伝承が『真実摂経』の成立以後のものである可能性を示唆していると言うことができよう。そこで第三の点にも関連するが、とくに第四の点についてさらに検討したい。

『略出経』の四巻本には、曼荼羅造壇にあたって「擇地等の法は、蘇悉地経の説に異ならず」（六巻本はたんに「経」とある）として、『蘇悉地経』の名があげられ、また五相成身観に先立つ文に十縁生句的記述や「一百六十世間心」[37]の言葉があり、『大日経』住心品の思想的影響も見

られることは知られている。しかし『真実摂経』に先行する経軌の影響はアーナンダガルバの『金剛出現』にも窺える。[38] そうした『真実摂経』に先行する経軌は別にして、重要なのは『真実摂経』より後に成立したものも『略出経』や『金剛出現』には反映されているのではないかという点である。『略出経』には、それらの経軌についてはなんら言及されていない。しかし『真実摂経』以外の経軌に説かれるものと共通する要素についてはすでに指摘がなされている。

その中でもっとも重要なものが、チベット大蔵経に伝えられている『金剛頂大秘密瑜伽タントラ』[39]（Vajraśekharamahāguhyayogatantra 以下『金剛頂タントラ』と略す）である。このタントラは漢訳には未伝であるが、その内容の一部は不空三蔵の訳経の中にも伝えられている。また『金剛出現』において、『金剛頂』（Vajraśekhara）・『蘇婆呼童子請問』・『吉祥最勝本初』といった経軌との関連が僅かに記されているが、その中で『金剛頂タントラ』からの引用、あるいはそれに基いていると思われるものがもっとも重要な位置にある。[40] この『金剛頂タントラ』は、『真実摂経』がインド・チベットの瑜伽タントラの根本タントラとされているのに対し、その根本タントラの内容を補足し注解する釈タントラとして重要な位置にあり、また『真実摂経』の内容をさらに一歩すすめた独自の内容を有している。不空三蔵の『十八会指帰』に対比すれば、現在チベット訳に伝えられているものは、その前半部が第三会にあたり、後半部が第二会に相当する。最近の研究では、前半部と後半部は本来別個のもので、それぞれ独立したものであったとされている。内容的には、前半部は一切諸仏の請問に応じて、金剛薩埵が種々の修法や儀礼について説明する形式をもっている。それに対し、後半部は金剛界品に続いて降三世品の途中までで終わっているとは言え、ほぼ『真実摂経』に添う内容をもっている。[41]

『金剛頂タントラ』からの影響に関して『略出経』と『金剛出現』を比較すると、『金剛出現』には『金剛頂タントラ』からの本文の引用がはっきりと確認されるところがいくつかあるのに対し、『略出経』には引用文が顕著に見られないという違いがある。それゆえアーナンダガルバが『金剛出現』を作成するにあたって『金剛頂タントラ』を依用したことは間違いないにしても、同様のことが『略出経』の成立の場合にも言えるかどうかは問題の残るところではある。しかし『略出経』に『金剛頂タントラ』と共通する基本的な思想が存在するのを見ると、『略出経』もその影響下にあると考えても差し支えないのではなかろうか。

四　『金剛頂タントラ』の五部思想

さて『金剛頂タントラ』の基本的な思想というのは、五仏と結び付いた五部族の思想である。すでに指摘されている様に、『真実摂経』には未だ五部組織が成立しておらず、四部組織の段階に止まっている。すなわち金剛界品・降三世品・遍調伏品・一切義成就品の四大品は、それぞれ如来部（tathāgatakula）・金剛部（vajrakula）・蓮華部（padmakula）・摩尼部（maṇikula）という四部族に対応するのに対し、羯磨部（karmakula）は実際には説かれていないのである。[42] このことは四大品に続いて説かれている教理分でも同じである。教理分には一例「羯磨部」という語のあることが確認されているが、これも摩尼部（『真実摂経』では宝部とは言わない）に代って用いられている語と見られている。[43] 同じような例は一切義成就品の品名にも使用されているので誤記とは認められないが、いずれにせよ『真実摂経』では羯磨部は独立して説かれていない。しかも『真実摂経』では、五仏と五部族が明確に結び付いていなかった。[45] その意味で、『真実摂経』は三部組織から五部組織へ転換する過渡期に成立したものとも言えなくもない。ただしすでに五部組織への萌芽のあることは認められよう。

この羯磨部を加えた五部組織を説くのが、ブッダグヒヤ（Buddhaguhya）も述べているように『金剛頂タントラ』である。[46]『金剛頂タントラ』には、いわゆる都部曼荼羅ともいわれる五部具会の曼荼羅が説かれている。『真実摂経』で個別に説かれていた四大品の曼荼羅を統合することを意図した、一八九尊からなる大規模な曼荼羅である。この曼荼羅の記述の中に、つぎのような五部思想の基本的な要素が述べられている。[47]

（五仏）	毘盧遮那	阿閦	宝主（宝生）	無量寿	不空成就
(a)部族	仏	金剛	宝	蓮華	羯磨
(b)方位	中央	東	南	西	北
(c)身色	白	青	黄	赤	緑
(d)印相	覚勝（智拳）	触地	与願	三摩地施（禅定）	施無畏
(e)座（乗物）	獅子	象	馬	孔雀	金翅鳥
(f)三昧耶形	殊勝金剛	金剛	宝	蓮華	種々（羯磨杵）

さて『真実摂経』では五仏とこれらの諸要素の関係が必ずしも明確でないということは、『金剛頂タントラ』が『真実摂経』の発展上に成立していることを物語っているのではなかろうか。

このうち、まず(a)部族は先述のとうり『真実摂経』では四部族で、五仏は一切如来を代表し、部主になっていない。

次の(b)方位も、中央の毘盧遮那を除く四仏については明確ではない。『真実摂経』では、世間的な方位を示す東・南・西・北という言葉は用いられていない。用いられているのは、中心となるものに対して前・後・左・右という言葉である。しかしこの言葉によって世間的な図絵曼荼羅の画き方も暗示されている。[48] 例えば三十七尊出生段には、阿閦をはじめとする四仏の各四親近は、それぞれ四仏の前・右・左・後と次第し、また続いて四波羅蜜は中央の毘盧遮那の前・右・後・左と次第することが記されている。[49] しかし前方（puratas）というのは東方を意味する語でもあることから考えて、この場合の四波羅蜜は毘盧遮那の東・南・西・北に位置することが予想される。しかも四波羅蜜は後述するように、『真実摂経』において各四仏の三昧耶形とされ四仏と密接な関係にあるから、阿閦をはじめとする四仏の位置も四波羅蜜にしたがって、毘盧遮那の東・南・西・北に位置すると判断することは可能である。また金剛薩埵・金剛宝・金剛法・金剛業の四菩薩は、それぞれ阿閦をはじめとする四仏の各四親近の第一の菩薩の心真言に用いられている名でもあるから、四礼[50]で行われる作法も右遶の法則にしたがっていることがわかる。ただし各四親近の十六大菩薩の場合、各四仏の前・右・左・後をそのまま東・南・北・西にすべきかどうかは問題がある。そういった実例が金剛界曼荼羅の遺品の中にも存在するが、[51] それぞれ四親近の第一が四波羅蜜と同質のものを三昧耶形とすることから、金剛薩埵と金剛波羅蜜、金剛宝と宝波羅蜜、金剛法と法波羅蜜、金剛業と羯磨波羅蜜を不可分の関係に置き、それぞれを近接して各四仏の前、すなわち西・北・東・南とするのが本来であったと考えられる。このことはまた四仏が毘盧遮那如来に対面していることを示している。それゆえ各四仏の左側に住すると記されている内四供養も、それぞれ内輪の東南・南西・西北・北東に位置することになるわけである。[52]

次の(c)身色も『真実摂経』には説かれていない。ただし、弟子が入壇する場合に着ける衣や覆面の色については規定があり、金剛界品（如来部）では赤色、降三世品（金剛部）では青色、遍調伏品（蓮華部）では白色、一切義成就品（摩尼部）では随意とされている。[53] また『略出経』にも引用されているが、遍調伏品の第二章秘密曼荼羅の入壇作法の中に授法の差別を説いた文があり、弟子が白色の相を見れば最上悉地智を、黄色の相を見れば義理成弁智を、赤色の相を見れば随愛智を、黒色の相を見れば降伏智を、雑色の相を見れば一切悉地智を教えるとある。[54] とく

に後者は、五仏の徳性に配分すると『金剛頂タントラ』に近いものがあると言えなくもない。

次の(d)印相は『真実摂経』ですでに説かれていた五仏の羯磨印が採用されている。『真実摂経』では四種印智が説かれているが、そのうち手印として用いる基本的なものは三昧耶印と羯磨印の二種である。[55] 大印は尊容を示し、法印は真言で示される。二種の手印のうち、三昧耶印はその名の示すとうり、諸仏諸菩薩の本誓（samaya）を標幟する三昧耶形を、両手で組む印相によって表したものである。例えば五仏の三昧耶印はそれぞれ月輪上にある仏塔・金剛杵・宝珠・蓮花（蓮弁）・羯磨杵を表していると思われる。[56] それに対し羯磨印はその名のとうり、諸仏菩薩の事業（karma / karman）を表す。尊容である大印と結び付いており、三昧耶が自利的で悟りの境地を表すのに対し、利他的な働きに重点が置かれている傾向にある。[57]『真実摂経』の四種印智は実は三十七尊出生段に原型がある。たとえば十六大菩薩の出生段のところでは、[58] それぞれ三昧耶形から出生した各薩埵が金剛名灌頂される際、毘盧遮那如来から各三昧耶形が授けられ、その三昧耶形を手にして、ある所作をおこなうことが説かれている。二種の手印に関して言えば、三昧耶印はその場合の三昧耶形に対応し、羯磨印はその所作に対応している。『真実摂経』では大印としての五仏の尊容が、出生段では明確に説かれていなかったが、出生段における十六大菩薩の尊容が四種印智のうちの羯磨印智に説かれているものと対応することから、五仏の尊容も羯磨印をもつことは予想されている。なお四種印智におけるこれら二種の手印に関して、例えば四波羅蜜の三昧耶印が説かれないのは、出生段にあるように、四波羅蜜は一切如来すなわち四仏の智慧を印（三昧耶形）で標幟したものであるから重ねて示す必要がないことによる。[59] また羯磨印が説かれないのも四波羅蜜は四仏の智慧を表す三昧耶形であるから、出生段には大印としての尊容が説かれず、所作が示されていないことによる。ただしその後、図絵曼荼羅において四波羅蜜の尊容化もなされていることは周知のとうりである。

次の(e)座（乗物 Tib.bshon pa. Skt. vāhana）は、中央の毘盧遮那が獅子座である以外は『真実摂経』ではまったく説かれなかった新しい要素であると言える。とくにこの五獣座は『金剛頂タントラ』では五部族を象徴する重要な要素とされている。ただし四仏に象・馬・孔雀・金翅鳥と配する要因は『真実摂経』にも存在すると考える。それは出生段において、十六大菩薩の中でも重要な尊格であり、四仏ともっとも密接な関係にある金剛薩埵・金剛宝・金剛法・金剛業が各転輪位に灌頂されると説かれている点である。[60] このことは転輪聖王との関係をイメージさせる。転輪聖王の七宝には、輪宝・象宝・馬宝・珠宝・王女宝・居士（主蔵臣）宝・主兵臣宝があるが、この中の馬宝について、例えば『十住毘婆沙

論』巻十七には「馬の相は色を具足すること孔雀の頸のごとし。その体の軽疾なること金翅鳥王のごとくにして飛行無礙なり。これを馬宝と名づく」[61]とある。このことから見て、七宝の中から象宝・馬宝をえらび、さらに『十住毘婆沙論』の馬宝のたとえに出てくる孔雀と金翅鳥を加えて四仏の座（乗物）に採用したものかどうかは確定できないが、いずれにしてもこれらの四獣座が転輪聖王にゆかりのあるものが択ばれた可能性はあるであろう。また『真実摂経』に説かれる金剛界曼荼羅自体、転輪聖王の都城（スメール山頂の帝釈天宮）のイメージと密接な関係が想起され[62]、曼荼羅諸尊も七宝との関係がある可能性もある。

最後の(f)三昧耶形は、『真実摂経』の金剛秘密曼荼羅（三昧耶会）で、中央の毘盧遮那如来の三昧耶形を仏塔[63]（caitya）とする点が異なる。『金剛頂タントラ』において殊勝の金剛としているのは、『真実摂経』の三十七尊出生段から予想される。『真実摂経』で毘盧遮那如来の三昧耶形が仏塔とされていることは知られていたであろうが、『金剛頂タントラ』はその説を採用せず、出生段の四波羅蜜が四仏の三昧耶形であることから、出生段に遡る五相成身観の薩埵金剛[64]（月輪上の金剛杵）を毘盧遮那如来の三昧耶形に用いたものと考えられる。

以上のように『金剛頂タントラ』では、『真実摂経』でも予想されていたものがあるとは言え、明確に説かれなかった要素も加わり、五部組織のもとに五仏の諸要素が新しく組織立てられていることがわかる。その中ではとくに座（乗物）としての五獣座の要素が『金剛頂タントラ』特有のものと推測される。

では『略出経』の場合はどうであろうか。『略出経』はすでに指摘されているように、『真実摂経』の四大品と教理分に説かれなかった五部思想を背景にしている。まず五部族と五仏の関係について指摘したい。『略出経』には『真実摂経』の三十七尊出生段がほぼ全文引用されているが、『略出経』にはさらに付加要素がある。まずこの引用文に先立って、つぎのように五部族を表示する五獣座がそれぞれ三種字によって成就されるという文がある。なお同様の文が『金剛出現』、クラダッタ（Kuladatta）のKriyāsaṃgrahaなどにも引用されているので、それらの三種字も列挙しておく。[65]

（部族）	（座）	（三種字、中央・左右）	『金剛出現』	Kriyāsaṃgraha	プトン『金剛出現広釈』
如来部	四面方等獅子座	心字・阿引声字	a　siṃ a	āḥ　siṃ āḥ	āḥ　siṃ āḥ
金剛部	象座	俄重声字・吽字	hūṃ gaṃ hūṃ	hūṃ gaṃ hūṃ	hūṃ gaḥ hūṃ

宝部	馬座	麼字・怛囉字	tra vā tra	traḥ vā traḥ	traḥ vā traḥ	
蓮華部	孔雀座	摩含二合字・頡唎異三合字	hriḥ maṃ hriḥ	hriḥ maṃ hriḥ	hriḥ maṃ hriḥ	
羯磨部	迦楼羅（金翅鳥）	剣字・阿短字	a gaṃ a	aḥ kaṃ aḥ	aḥ gaṃ aḥ	

この文に続いて出生段が引用されているわけであるが、そこには中央および東・南・西・北の四方にある五獣座の上に、それぞれ四面の毘盧遮那・阿閦鞞・宝生・阿弥陀・不空成就の五仏が住する文が加えられている。このように『略出経』では『金剛頂タントラ』と同様に五部族と五仏および五方を関係付けているのである。しかもその後に説かれる十六大菩薩のところでは、薩・王・愛・喜の四菩薩は金剛部阿閦仏の眷族、宝・光・幢・笑は宝部の四菩薩、法・利・因・語は蓮花部の四菩薩、業・護・牙・拳は羯磨部の四菩薩とされ、四波羅蜜は如来部、内四供養は四部とされているのである。[66] これらの尊格を五部に配分する記述は『真実摂経』にはみられない特色である。このうち中央の毘盧遮那は四面とされているが、『金剛頂タントラ』では明記されていない。『真実摂経』には「一切方に面を向けて」[67]（sarvato mukhaṃ）とあるから、四面はこの記述に基いていると考えられている。しかし獣座で四面と言えば『悪趣清浄タントラ』の普明（sarvavit）の曼荼羅[68]があるので、その影響も考慮しなければならない。実際、金剛界曼荼羅の遺品の中には一面のものと四面のものとがそれぞれ存在する。この点は今後の研究に俟たねばならないであろう。

また『略出経』では五仏をはじめ各尊格に種字を用いている場合が多い。今の場合も、五部族の座を成就する三種字のうちの左右に五仏の種字が見られる。『真実摂経』ではこの五仏の種字も明らかではない。それに対し『略出経』では五部あるいは五仏を表示する種字が随所に用いられている。ただし鑁（vaṃ）・吽（hūṃ）・怛囉（traḥ）・紇唎（hriḥ）・阿（aḥ）とする場合が多く、[69] 今の例のように毘盧遮那如来の種字をāḥとするものは少ない。しかし同様の文が『金剛出現』などにも存在するから、āḥとするのも何かに由来していることは間違いない。事実『理趣経』に存在する。[70] また胎蔵大日の真言にも用いられている。[71] それに対し、日本では金剛界大日如来の種字をvaṃとするのが一般的である。[72] これは『略出経』以来の伝統になったものと考えられるが、インド・チベットでは今のところvaṃはっきりと確認されていない。その理由の一つに、『金剛頂タントラ』において毘盧遮那如来の種字が明記されていない点があげられる。[73]『金剛出現』でもはっきりしていないのは、[74] そこに原因があると思われる。いずれにしても、中国・日本で定着したvaṃの由来は今のところ不明なのである。[75] それに対し、五部の種字は『金

剛頂タントラ』において認められる。[76]『真実摂経』には、降三世品（金剛部）の大曼荼羅のところで、曼荼羅の造壇に際し、四仏に対応する金剛吽迦羅・金剛灌頂・金剛軍・金剛遍入の心真言として、hūṃ, traḥ, hrīḥ, aḥ が用いられている例があり、[77]また遍調伏品でも、真言の末尾にそれぞれ順序通り記されている例がある。[78]それゆえ四仏の種字は『真実摂経』にも見られないことはない。しかしそれらの例から四部・四仏の種字としてすでに『真実摂経』において成立していたとは認められない。

また十六大菩薩の種字について付言しておくと、これらの種字は『真実摂経』の金剛界品の第二章金剛秘密曼荼羅において、四種印智の法印の箇所で説かれている。[79]このうち注意されるのは金剛薩埵の種字で、『真実摂経』では āḥ とするのに対し、『金剛頂タントラ』では hūṃ を用いている。[80]『略出経』では四波羅蜜を除く三十三尊の羯磨印を説明するところで、『真実摂経』の三十七尊出生段にある各尊の真言が説かれ、真言の前に oṃ を、末にそれぞれの種字を加えている。その場合、金剛薩埵に対して、『略出経』では「阿引」[81]を使用している。このように『真実摂経』と『金剛頂タントラ』とが異なる場合、『真実摂経』を優先し、むしろ『金剛頂タントラ』とは不整合になることもある。

このような例は三昧耶形にもある。『金剛頂タントラ』では毘盧遮那如来の三昧耶形として、殊勝の金剛すなわち五股金剛杵を用いる。それに対し『略出経』の入壇作法のところには、五種の三昧耶形をあげて、つぎのように説かれている。すなわち、

「もし金剛部を得れば、婀字の内に於て、跋折囉ありと想うべし。宝部を得れば宝珠あり、蓮花部には蓮花あり、羯磨部には羯磨跋折囉あり、毘盧遮那部には宰覩波ありと想うべし。[82]」

とあり、宰覩波すなわち仏塔が採用されているのである。このように仏塔を用いるのは『真実摂経』そのものに由来する。また『略出経』には三昧耶曼荼羅の記述があるが、それは『真実摂経』の金剛秘密曼荼羅からの引用文でもある。[83]それゆえこれらの記述は、金剛智三蔵が『金剛頂タントラ』の記述を知悉していなかったというよりは、根本経典の『真実摂経』を優先したためと考えるべきであろう。なお金剛界の三昧耶曼荼羅で、毘盧遮那如来の三昧耶形として金剛杵を用いる例は、アバヤーカラグプタ（Abhayākaragupta）の Vajrāvalī や、[84]クラダッタの Kriyāsaṃgraha にも見られ、[85]その伝承も存在したことが確認できる。

この外、『略出経』の五部思想としては、四種の念誦に用いられる五種の数珠説がある。[86]「四種数珠」という用語を用いているが、如来部は菩提子、金剛部は金剛子、宝部は宝珠、蓮花部は蓮子、羯磨部は雑宝を用いるとある。これも『金剛頂タントラ』に同様の文が説かれているので

ある。なお先の『金剛頂タントラ』の五部思想のうち身色については『略出経』には明記されていない。

以上『略出経』の性格について、とくに五部思想にしぼって検討してみた。その外、弟子の入壇に際して、『真実摂経』ではその器非器は問われなかったが、『略出経』や『金剛出現』ではそれが問われてもいる。[87] この点は『金剛頂タントラ』でも説かれており、『金剛出現』はこれに関しても『金剛頂タントラ』に依存している。[88]

『略出経』には『金剛出現』のように、『金剛頂タントラ』の本文そのものからの引用文であるとして明確に判断できるものは少ない。[89] しかしすでに指摘したように、『真実摂経』以後に展開した『金剛頂タントラ』と共通する要素を有していることは明かである。また『理趣釈』に金剛智三蔵が五部具会の曼荼羅を伝えていたと言われていることも重要である。[90] このように考えてくると、金剛智三蔵のいう「十万頌の金剛頂大瑜伽教王」自体、『金剛頂タントラ』に説かれる要素を含んでいたと推測される。もちろんそれ以外の要素も含まれている可能性はあるが、五部思想というもっとも基本的な思想は『金剛頂タントラ』の影響下にあるといって間違いないであろう。そしてとくに「金剛頂」という名を持つものが、今のところ『金剛頂タントラ』にしか見出せないことを考えると、「金剛頂経」の名そのものも『金剛頂タントラ』の名称と密接な関係にあると推定することも許されるのではないか。『金剛頂タントラ』は純粋な意味での経典ではないが、『真実摂経』の釈タントラという性格があるように、『真実摂経』を解釈する場合の軌範書としてインド・チベットでもっとも重視されてきたものである。おそらくインドにおいて『金剛頂タントラ』が成立するや、五部組織を説く『金剛頂タントラ』によって『真実摂経』を解釈する流れがあり、日本における『大日経』に対する『大日経疏』、また『理趣経』に対する『理趣釈』のような位置に置かれていたのではないかと思われる。もちろん『金剛頂タントラ』自体、現存のチベット訳に対してどのような形態で成立していたか不明ではある。

『略出経』の性格は五部組織に立つ『金剛頂タントラ』の思想を背景にして、「一切如来所摂真実の最勝秘密の法」すなわち『真実摂経』（とくに金剛界品）の念誦法を構成している点に見出されると考える。その意味で、金剛智三蔵の時代においても、『真実摂経』は四部組織にある四大品を含めた、現存の完本に近い形である程度成立していたのではないかと推測される。そして「金剛頂経」の名は直接『金剛頂タントラ』の名から導かれたものであろうが、『真実摂経』や『金剛頂タントラ』を含む瑜伽経軌全体の思想的バックボーンとして、より普遍的な意味で「十万頌」という広大な量をもつ形に想定されたのではないかと推測される。

五　「金剛頂経」の名の由来

ところで、中国・日本で伝承されてきた「金剛頂経」の名の由来が『金剛頂タントラ』の名称に求められるということは、すでに酒井真典博士によって指摘されていたことである。酒井博士は「金剛頂経の第三会」と題する論文の中で、つぎのように述べられている。

「次にこの十八会全体の『金剛頂経』なる名は『初会経』に順じたものではなく、弘法大師は『金剛頂経開題』においてvajra唐翻云金剛uṣṇīṣa翻云頂なる語を当てられているが、uṣṇīṣaは本来人物の頭頂を指すものであり、事物としてこの金剛の頂はvajraśekharaに由来するものと思われる。したがってまた、この事は漢訳中の「金剛頂」の名を冠するものの中の、主として不空訳の諸経と相い関連する事を知り得るのである。[91]」

ところがその後、「金剛頂経」に関する研究や解説の中で、この酒井博士の説を取り上げて論じたものに出会うことがほとんどない。[92]また今日でも、弘法大師の開題にしたがって「金剛頂」の原名をvajra-uṣṇīṣaとする説もある。[93]しかし弘法大師の示された不空訳の経題に対する梵文が『真実摂経』の原名に合わないのを見ると、[94]冒頭にある「金剛頂」の原名もvajra-uṣṇīṣaであったとは言いきれない。『金剛頂タントラ』の『略出経』への影響を考えると、やはり酒井博士の説の方に妥当性があると言えよう。

しかし問題もある。それは訳語に関するものである。『真実摂経』には「金剛頂」という用語は見出すことができないが、その原名が『金剛頂タントラ』から導き出されるvajraśekhara（デルゲ版）あるいはvajraśikhara（ペキン版）であるとするならば、それに近い表現はある。すなわちスメール山頂にあるとされる「金剛摩尼宝峯楼閣」[95]（vajramaṇiratnaśikharakūṭāgāra）がそれである。それゆえ「金剛頂」（vajraśikhara）とは、本来金剛界曼荼羅を現出する場として『真実摂経』に説かれる楼閣名から導き出されたもので、その楼閣を象徴する言葉であったと推測される。問題は、śikharaに対して「峯」という訳語が用いられている点である。これは不空訳三巻本、施護訳三十巻本だけでなく『略出経』も同じである。それに対して、如来の仏頂を意味するuṣṇīṣaという語も『真実摂経』の降三世品の教勅曼荼羅[96]に現れるが、訳文の存在する施護訳では「頂」あるいは「頂輪」と訳されている。これらの訳語の例から見て、「金剛頂経」の原名がvajraśikhara（あるいはvajraśekhara）であるとは言い切れない面もある。その他、参考までに例をあげると、弘法大師も「金剛頂経」の一つとして重視された、金剛智訳（一説に不

空訳）『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』がある。経題の「金剛峯楼閣」という語は vajraśikharakūṭāgāra と還梵されるが、それに対し、第二品にある愛染明王の真言[97] oṃ mahārāga vajroṣṇiṣa vajrasattva jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ に対応する訳語と思われるものに、第五品の「大染金剛頂[98]」という一文があり、この場合「大染」は mahārāga,「金剛頂」は vajra-uṣṇiṣa にそれぞれ対応する。さらに第八品にも oṃ mahāvajroṣṇiṣa hūṃ traḥ hriḥ aḥ hūṃ という大勝金剛頂最勝真実三昧耶真言が説かれているが、「大勝金剛頂」も mahāvajra-uṣṇiṣa に対応するであろう。このように śikhara には「峯」、uṣṇiṣa には「頂」が当てられている場合の多いことを考慮すると、「金剛頂経」の原名を vajra-uṣṇiṣa とする説もあながち根拠がない訳ではない。

しかし、『真実摂経』に関して言えば、降三世品の教勅曼荼羅は仏頂系のもので、それは『真実摂経』の一部を占めるものであり、uṣṇiṣa という語が全体を覆うキーワードには成りえない。それに対し、śikhara という語は金剛界曼荼羅が現出する楼閣名に使用されており、vajra-śikhara がそのような楼閣を意味するならば、諸仏諸菩薩の集会する場としてきわめて象徴的な言葉となる。また経典名に「金剛頂」という語が使用されている例を調べると、確かに『金剛頂髻タントラ』（Vajroṣṇiṣatantra）という名のタントラが存在したことは事実のようである。しかしこのタントラは未伝のものであり、しかも『上禅定品』に関係のある所作タントラである。[100] 瑜伽経として伝えられている「金剛頂経」とは性格を異にする。その点、『金剛頂タントラ』は瑜伽タントラであり、『真実摂経』の釈タントラとして重要な位置にある。このように考えてくると、「金剛頂経」の原名は Vajraśikhara（あるいは vajraśekhara）の方が可能性が高い。ただしその場合も、先述したように、本文の用例において「峯」と訳されているにもかかわらず、経名には何故「頂」としたのかは不明である。今のところは、たんに『真実摂経』に説かれる楼閣を意味する用語と区別して、広大な経典の総称を示すために「頂」を採用したものと推定しておきたい。

六　むすび

以上、中国における「金剛頂経」の伝承に関して、とくに中国へ最初にその伝承を齎した金剛智三蔵の『略出経』を中心に検討したが、その名称の由来は、すでに酒井博士が指摘されているように、釈タントラとしてチベット大蔵経に伝わる『金剛頂タントラ』に求められると考える。

またこのことは、中国に伝えられた「金剛頂経」の思想がその当初から、根本経典の『真実頂経』を基盤としつつも、インドにおいてその後に展開し発展した解釈に従って将来されたことを物語っている。

擱筆するにあたり、以上の中で論じた五部思想については、頼富本宏博士の『密教仏の研究』(法蔵館、一九九〇年）から多くの示唆を受けたこと、また五仏の種字については、本学助手の加藤義尚氏からヒントを得たことをおことわりしておきたい。記して謝意を表する次第です。

註

（1）弘法大師も『金剛頂経開題』の中で、十八会の経軌は同じく金剛頂相応の法を説くから通惣して「金剛頂瑜伽」と名づくとし、広義の意味で解釈している。弘全一輯、六九一、六九五頁。なお小野塚幾澄「空海教学と『金剛頂経』」（『大正大学研究紀要』六六所収、昭和五六年）を参照。

（2）大正一八巻、八六九番。

（3）堀内寛仁編『梵蔵漢対照　初会金剛頂経の研究　梵本校訂篇』上下二巻（密教文化研究所、上巻　昭和五八年、下巻　昭和四九年）、および東北四七九番、大谷一一二番。

（4）大正一八巻、八六五番、八八二番。

（5）金剛界品は「一切如来大乗現証大教王」(Sarvatathāgatamahāyānabhisamaya mahākalpa-rāja) という。不空訳・施護訳は本文中に出る kalpa に対して「教」と訳している。前田崇著『蔵梵漢対照　初会金剛頂経索引』（国書刊行会、昭和六〇年）参照。

（6）大村西崖著『密教発達志』（国書刊行会、昭和四七年復刻）、松長有慶著『密教――インドから日本への伝承』(中公文庫、一九八九年）参照。

（7）大正五五巻、五七一頁。

（8）大正五五巻、七四八頁。

（9）大正五五巻、八七五、八七六頁。

（10）惠運（七九八～八六九年）、宗叡（八〇九～八八四年）将来の菩提金剛訳『大毘盧遮那仏説要略念誦法』を加えれば十七部となる。なお『毘盧遮那三摩地法』と『瑜祇経』は、弘法大師の『御請来目録』では不空訳に含めている。しかし前者については、『付法伝』において、金剛智訳として取り扱われ、また後者も『三十帖策子』では金剛智訳とある。金剛智三蔵の訳経の問題点については、加藤精一著『密教の仏身観』（春秋社、平成元年）五五頁、七七頁以下参照。

（11）大正二四一、八六六、八七六、九三二、一〇八七、一一一二、一一七三番。

（12）大正二〇巻、八六七番。

（13）酒井真典「文殊菩薩の五字呪法」（『酒井真典著作集』第三巻所収、法蔵館、昭和六〇年）参照。

（14）『密教大辞典』（縮刷版　法蔵館、昭和五八年）七一三、七〇九、七一二頁参照。

（15）『続天台宗全書（密教2）』所収（清田寂雲校訂、春秋社、昭和六三年）、遠藤祐純・苫米地誠一「『金剛頂瑜伽中略出念誦経』六巻本・四巻本対照研究」（『仏教文化論集』5所収、川崎大師研究所、昭和六三

年）参照。また国訳は、金剛頂経研究会編「六巻本「金剛頂瑜伽中略出念誦法」の訳注研究（一）～（五）」（『大正大学綜合仏教研究所年報』一一～一五所収、平成元～五年）参照。

(16)『御請来目録』に出る。弘全一輯、九三頁参照。

(17) 大正三九巻、八〇八頁、および『続天台宗全書（密教2）』一三〇、一三一頁参照。

(18) 大正五一巻、七八四頁中下。

(19) 大正一八巻、二八七頁中下。

(20) 大正一八巻、四四五頁中。

(21) 鈴木宗忠著『鈴木宗忠著作集　第五巻　基本大乗（秘密仏教）』（巌南堂書店、昭和五三年復刻）一〇九～一一二頁、および松長有慶著『密教経典成立史論』（法蔵館、昭和五五年）一九〇頁参照。

(22) 大正一八巻、二二三頁下。

(23) 注(15)『続天台宗全書（密教2）』五九頁下、『仏教文化論集』三二頁。

(24)『略出経』の四巻本（大正一八巻）で言えば、およそ第二巻末にある五相成身観の第五・仏身円満のあたり（～二三九頁中）までがほぼ本尊瑜伽を説いた成就法に相当し、第三巻のはじめより第四巻の諸天鬼神の真言を説いた箇所（～二四八頁下）までが曼荼羅造壇法に相当し、その後の箇所が入壇灌頂法に相当しよう。『真実摂経』は、注(4)の堀内校訂梵本の§195までに五相成身観・三十七尊出生段などの本尊瑜伽が説かれ、§§196～209に曼荼羅造壇法が説かれ、§§210～234までに入壇灌頂法が説かれるという次第になっており、§235以下にそれらを実践するに必要な四種印智など諸種の修法が整理されている。

(25)『略出経』の『真実摂経』と対応する箇所は、高橋尚夫「『略出念誦経』と『ヴァジュローダヤ』」（『密教学研究』一四所収、昭和五七年）に出されている対照表を参照。また『両部大経　上』（真言宗豊山派宗務所、昭和五八年）所収の四巻本国訳文（高橋尚夫訳）の頭注と脚注、および注(15)金剛頂経研究会編の六巻本国訳の頭注と脚注に、堀内校訂梵本との対応箇所がくわしく指摘されている。ただしいずれも『略出経』の曼荼羅造壇法を説いた箇所に含まれる四種印智に関して誤解がある。

その外、堀内寛仁「金剛界次第の印・真言について」（『密教学研究』一九所収、昭和六二年）、同「成身会における三マヤ印」（『密教学会報』二六所収、昭和六二年）には、金剛界法と『真実摂経』の対応関係が指摘されており、『略出経』の本尊瑜伽を説いた成就法との対応関係が確認できる。

(26) 大正一八巻、二四〇頁中下。堀内校訂梵本§§347～355に対応する。

(27) 大正一八巻、二四〇頁下。

(28) 大正一八巻、二四〇頁上中。

(29) 日本では灌頂儀礼において用いられる敷曼荼羅として三昧耶曼荼羅を使用する流派が多いが、そのほか種字曼荼羅や尊形曼荼羅を用いる流派もある。詳しくは栂尾祥雲著『秘密事相の研究』（高野山大学、昭和一〇年、臨川書店、昭和五七年復刻）一〇一、一〇二頁参照。日本ではインドのように土地の上に色粉で画く訳ではないので、尊形の曼荼羅を使用することが十分できたわけであるが、三昧耶曼荼羅を用いるのは、伝統の維持を重視しているためである。同書に指摘されている『蒙耶四耶経』巻中には、曼荼羅を画く方法に形像と印と座を用いる様式があるとして、次のように説かれている。

「一は尊の形像を画き、二は画いてその印を作る。三は但その座を置け。(1)若し像を画かば、阿闍梨極めて須く好く能くその形貌を画すべし。……これを形像を画する法と名づく。(2)若し絶妙に画せずんば、応に契印を置くべし。假使能く一切の諸相を画するも一一に

具足することに成を得べきこと難し。縦作さんと欲う者、時分を淹滞して多く形像を作ると、亦復不善にして相貌具せざれば、即ち霊験無く、及び成就せじ。是故に当に契印を置くべし。或は当に唯三部の主の尊の形像を画いて置くべし。余は契印を作せ。……その諸尊等の所執持の器杖に隨う、即ちこれ彼の印なり。是の如く略して諸尊の契印を説かん。……苦し形像を画かば、契印と及び座との三種応に具すべし。……これを契印の法と名づく。(3)ただ座を置くには、その三部の尊の座は皆円形に作れ。院と相応せよ。其真言を誦じて中に一点を置け。自余の尊には、或は円及び方にせよ。各の彼等の真言を誦じて、中に一点を置け。その外院の尊は、但名号を呼び唯一点を置け。亦方円なし。……これを第三の安座の法と名づく。

若し急速の事を作さんに、力及ばずんば応に座の曼荼羅を作るべし。或は一及び二、三の曼荼羅の法を作れ。その三部の主には其形像を画け。余の諸尊等には但契印を置け。外院の諸尊は唯その座を置け。……これを殊勝の広略の曼荼羅の法と名づく。

その先の諸説の形像の法にして、若し具足せざれば即ち起し難きことあり。最後の第三の処、総て空なれば亦吉と為せず。中間の契印は過にあらず、空にあらず、最もこれ微妙なり。如法に供養すれば皆霊験あり。亦復、能くその尊を表することを作し易し。是の故に慇懃に応に契印を用いて曼荼羅を作るべし。」（大正一八巻、七六五頁、『国訳一切経』密教部二、一一二六～一一二八頁参照。）

なお、同処を含むチベット訳に関しては、高田仁覺「曼荼羅(maṇḍala)の通則について」（『高野山大学論叢』五所収、昭和四五年）に和訳文と詳しい研究がある。

(30)　東北二五一六番、大谷三三三九番。見在するサンスクリット原典の断簡の校訂文ならびに和訳は以下の諸論稿に発表されている。

森口光俊「Palm Ms : Sarvavajrodaka について――belonging to National archives, C. No. tṛ 360――」（『大正大学綜合仏教研究所年報』六所収、昭和六〇年）、密教聖典研究会「Vajradhātumahamaṇḍalopāyika Sarvavajrodaya――梵文テキストと和訳（Ⅰ）」（『同研究所年報』八所収、昭和六一年）、同研究会「同（Ⅱ）」（『同研究所年報』九所収、昭和六二年）、森口光俊「Vajradhātumahamaṇḍalopāyika Sarvavajrodaya 梵文テキスト補欠――新出写本・蔵漢対照・賢劫千仏名を中心として」（『智山学報』三八所収、昭和六三年）、高橋尚夫「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現――余滴」（『豊山学報』三三所収、昭和六三年）。

また残りの部分はチベット訳から和訳され以下の発表がある。

高橋尚夫「金剛界大曼荼羅儀軌一切出現　第一瑜伽三摩地品――和訳」（密教文化』一六一所収、昭和六三年）、同「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現――和訳――完」（『豊山学報』三二所収、昭和六二年）。

『金剛出現』と『真実摂経』の対応関係については、これらの諸論稿に指摘されており、それを参照した。

(31)　『金剛出現』と『略出経』との対応関係については、高橋尚夫「『略出経』と『Vajrodaya』――供養会について」（『勝又俊教博士古稀記念論集　大乗仏教から密教へ』所収、春秋社、昭和五六年）、および注（25）の高橋前掲論文を参照。なお前者で取り扱われている十七雑供養と類似する十八種は『金剛頂タントラ』にも説かれている（cf. Ota. no. 113, Na 180b～181b）。

(32)　ターラナータは、アーナンダガルバの活躍時代をパーラ朝のマヒーパーラ（Mahaipala）王の時代であったとする。近年のインド碑銘等の研究によれば、マヒーパーラ王一世の統治時代は一説に九八八～一〇三八年とされているから、十世紀後半から十一世紀前半に属することになる。しかしまた一方、ターラナータは、マヒーパーラ王がなくなったのはチベットのティ・レル（Khri ral）王の時代と同時期であっ

たと伝えている。ティ・レル王はレルパチエン（Ral pa chen）と呼ばれたティツク・デツェン王（Khri gtsug lde brtsan 八〇六～八四一年）のことであろうから、さらに九世紀前半に遡ることになる。これによって正確に判断することはできないが、いずれにせよ金剛智三蔵の時代より下ると見られる。D. Chattopadhyaya, *Tāranātha's History of Buddhism in India*, Simla 1970, p.284, および頼富本宏著『密教仏の研究』（法蔵館、一九九〇年）五八〇～五八一頁参照。

(33) Toh. no. 5104. Da 62 a.

(34) Toh. no. 2519, Ota. no. 3342.

(35) Toh. no. 2510, Ota. no. 3333.

(36) 『略出経』から見た『真実摂経』の成立状況については、注(29)の鈴木前掲書、一一〇～一一二頁を参照。

(37) 大正一八巻、二三九頁下、二三六頁下、二三七頁上。

(38) 注(25)の高橋前掲論文を参照。

(39) Toh. no. 480, Ota. no. 113. なおペキン版は Vajraśikhara- とする。

(40) 注(38)の密教聖典研究会「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyika-Sarvavajrodaya――梵文テキストと和訳――（Ⅱ）完」§63のほか、北村太道「覚密の供養論――『Tantrārthāvatāra』における――」（『密教学研究』四所収、昭和五七年）、また桜井宗信「Ānandagarbha の灌頂論」（『智山学報』三九所収、平成二年）に五部族の三昧耶や十四波羅夷法などを依用していることが指摘されている。

(41) 酒井真典「金剛頂経の第三会」（『酒井真典著作集』第三巻所収）、桜井宗信「Vajraśekhara タントラの一考察」（『智山学報』三五所収、昭和六〇年）参照。

(42) 金剛界品には sarvatathāgatakula、降三世品には vajrakula、降三世品の教勅には sarvavajrakula、遍調伏品には padmakula、一切義成就品には maṇikula という語の用例が主として見られる。『真実摂経』の部族説については、堀内校訂梵本、下巻二一九頁以下、また堀内寛仁「三十七尊出生段の四種灌頂について」（『奥田慈応先生喜寿記念　仏教思想論文集』所収、平楽寺書店、昭和五一年）、また注(40)の頼富前掲書、二〇〇～二〇二頁を参照。

(43) 堀内校訂梵本、§2559 および注(42)の堀内前掲論文を参照。なお教理分の続タントラは、如来・如来部・金剛部・蓮華部・摩尼部で構成され、続々タントラは、如来部・金剛部・蓮華部・摩尼部で構成されている。

(44) 堀内校訂梵本、§§1961, 2036, 2080, 2109, 2130. 一切義成就品は正式には sarvatathāgatakarmasamaya nāma mahākalpa-rāja といい、maṇi あるいは ratna とあるべきところに karma が用いられている。

(45) 頼富前掲書、二〇六～二三七頁参照。

(46) 『タントラ義入』（Tantrārthāvatāra）に、「羯磨部はこの『真実摂タントラ』には別に分けられていない。それは〔宝〕部の中に含まれているからである。……『金剛頂タントラ』には……羯磨部が余分に説かれている。それゆえかくのごとく五部族と称される」（cf. Toh. no. 2501, Hi 11b, 12a ; Ota. no. 3324, Dsi, 13b）と述べている。北村太道「『Tantrārthāvatāra』を中心とした『金剛頂経』の研究（二）」（『密教学』九所収、昭和四七年）一九～二二頁、および中條賢海「諸仏境界摂真実経について」（『豊山教学大会紀要』一一所収、昭和五五年）一七〇頁を参照。なお『タントラ義入』（Dsi 4a）には、『大真実摂』から五部の用語のある一節が引用されており、北村太道教授はパドマヴァジラの復注（Ota. no. 3325, Dsi 126b）には「大真実摂の十万瑜伽」とあると指摘されている。ただしこの所在は不明のようである。同「『Tantrārthāvatāra』を中心とした『金剛頂経』の研究（一）」（『密教学』七所収、昭和四五年）一五、二一頁参照。また頼富本宏博士は、この表現から「広本金剛頂経」を想定することも不可能ではないと指

摘されている。頼富前掲書、二〇七～二一四頁参照。いずれにしても『大真実摂』が如何なる経軌を指すのか、興味のある点である。

(47) 酒井真典「金剛頂経の第三会」（『酒井真典著作集』第三巻所収）一六七頁、また松長有慶「金剛界曼荼羅について――　レー周辺寺院の調査報告――」（『密教学研究』一〇所収、昭和五三年）、および頼富前掲書、二四一～二四六頁参照。cf. Toh. no. 480, Ña 178ab; Ota. no. 113, Ña 201b～202b.

(48) 『真実摂経』の三十七尊出生段は世間的次元にある図絵曼荼羅を表しているのではない。出生段の曼荼羅の性格、および図絵曼荼羅との関係については、堀内寛仁「初会金剛頂経所説の諸尊について――四仏・「普賢・金剛手・持金剛」――」（『高野山大学論叢』一六所収、昭和五六年）三一～三三頁を参照。

(49) 堀内校訂梵本、§§ 34～151. なお本文には一切如来とあるが、世間的次元として四仏のどれを指すかは、逆に§ 205の図絵曼荼羅に四仏とそれぞれの四親近の関係が示されていることから類推される。注(48)の堀内前掲論文を参照。

(50) 堀内校訂梵本、§§ 214～217.　堀内寛仁「四礼と四処加持」（『伊藤真城・田中順照両教授頌徳記念　仏教学論文集』所収、東方出版、昭和五四年）を参照。

(51) 柳澤孝「青蓮院伝来の白描金剛界曼荼羅諸尊図像」上下（『美術研究』二四一、二四二所収、昭和四〇年）を参照。

(52) 堀内校訂梵本、§§ 153, 156, 159, 162.

(53) 堀内校訂梵本、§§ 218, 895, 1545, 1892.

(54) 堀内校訂梵本、§ 1647.『略出経』は大正一八巻、二五〇頁上。なおこの文に対応するものが Kriyasamuccaya にも見られ、そこでは次のように白・黄・赤・緑・黒に対して、息災・増益・敬愛・降伏の四種悉地が説かれている。森口光俊「Ācāryakriyasamuccaya――灌頂(II)テキストと和訳（II―1）」（『宗教と文化　斎藤昭俊教授還暦記念論文集』所収、こびあん書房、平成二年）八六九頁を参照。

tato maṇḍalabhimukhaṃ siṣyaṃ cakṣuṣos te kīdṛśo 'vabhāsa iti pṛṣṭvā taduktaiḥ sitapītaraktaśyāmakṛṣṇāvabhāsair yathākramaṃ śāntipuṣṭivaśyābhicārasiddhibhāvyatām asya jñātvā.

(55) 堀内校訂梵本、§ 250以下。五仏の三昧耶印は§ 264、羯磨印は§§ 285, 286.

(56) 毘盧遮那来の三昧耶印は一般に「大日剣印」と言われているが、『密教大辞典』には、その印形は宝冠、大日尊成正覚の尊形、三昧耶形たる多宝塔など諸説あるとされている。しかし基本的には三昧耶形とするのが本来であると考える。ただし印相からは明確にしがたい。

(57) 三昧耶印と羯磨印の性格の相違については、頼富前掲書、二六二頁でも、三昧耶印は諸尊の内実を印相に表現したものであるが、修行者が行法中に結ぶことはあるものの、実際の尊格がその姿をとるのは、その尊格の作用を示す羯磨印であると指摘されている。また注(33)堀内寛仁「成身会における三マヤ印」、および高田仁覺著『インド・チベット真言密教の研究』（密教学術振興会、昭和五三年）五二八、五二九頁を参照。

(58) 堀内校訂梵本、§§ 34～138.

(59) 堀内校訂梵本、§§ 139～151.

(60) 堀内校訂梵本、§§ 42,68,93,118. また注(42)堀内前掲論文を参照。

(61) 大正二六巻、一二一頁中。

(62) このような転輪聖王との関係は釈尊以来の伝統を受け継いでいる面がある。『大パリニッーバーナ経』には、釈尊が当時小さな田舎町であったクシナーラーを臨終の地に選ばれた理由の一つに、そこがかって大善見王という転輪聖王の都城があった地であったからであるとされている。そして如来の遺体は転輪聖王の葬法にならって取り扱い、荼毘

に付してのち、転輪聖王と同じように四辻に如来のストゥーパをつくるべきであると説かれている（中村元訳『ブッダ最後の旅――大パリニッバーナ経――』岩波文庫、一九八〇年、一四〇～一四二頁、一三二～一三五頁、一六八～一六九頁参照）。なお帝釈天の都城を善見宮という。

(63)　堀内校訂梵本、§ 347.

(64)　堀内校訂梵本、§ 26.

(65)　『略出経』は大正一八巻、二二七頁中。また『念誦結護法普通諸部』（大正一八巻、九〇五頁中）にも出ている。『金剛出現』は Toh. no. 2516, Ku 149ab ; Ota. no. 3339, Si 17a, Kriyasaṃgraha は拙稿「Kriyasaṃgraha の本尊瑜伽――梵文テキスト（中）――」（『高野山大学密教文化研究所紀要』五所収、平成四年）一三七頁、またプトンの『金剛出現広釈』は Toh. no. 5105, Da 125b, 126a を参照。これらの資料の比較から、ここで用いられている五仏の種字は aḥ, hūṃ, traḥ, hriḥ, aḥ であったと考えられる。この五種字は不空訳『蓮華部心軌』や『二巻本教王経』でも用いられている（大正一八巻、三〇六上、三一八頁下）。なおプトンは五獣座の種字は、それぞれ siṃha, gaja, vāji, mayūra, garuḍa の名に由来し、梵本では迦楼羅座に対して kaṃ と出ているが誤りであろうとして gaṃ を採用し、象座に gaḥ を採用している。しかし梵本に kaṃ と出ているものがあったことは確かであり、むしろ象座との類似関係から、『金剛頂タントラ』にも出ている不空成就仏の kaṃ を用いた可能性もある。

(66)　大正一八巻、二二九頁中、二三〇頁下、二三二頁中、二三四頁上、二三四頁上中、二三五頁中、二二六頁中。

(67)　堀内校訂梵本、§ 32.

(68)　酒井真典「八輻輪曼荼羅」（『酒井真典著作集』第三巻）二五八頁参照。

(69)　『略出経』の五部・五仏の種字は次のように出ている（大正一八巻）。

五部	鑁	吽	怛囉二合	纈唎二合	婀　（二二五頁上）
四礼		吽	怛羅二合重呼之	奚哩引二合	婀引　（二二五頁中下）
器界	鑁				（二二七頁上）
大殿	鑁	吽	多囉二合	奚哩二合	悪重呼之（二二七頁上）
四仏加持		吽	怛囉	頡唎	婀　（二三八頁上中）
四仏灌頂		吽	怛囉	頡唎	婀　（二三八頁中下）
造壇	鑁（部）				（二四〇頁上）
羯磨印真言	鑁	吽	怛囉二合	頡哩重呼	悪重呼　（二四二頁中）
四仏灌頂		吽	怛囉	纈利	婀　（二五一中下）

これらの例から vaṃ, hūṃ, traḥ, hriḥ, aḥ と考えられる。ただ宝部・宝生の種字を traḥ, traṃ, trāṃ とするものもあり微妙である。『真実摂経』には traḥ があるが、『金剛頂タントラ』では宝部に trāṃ が用いられており、混同された可能性もある。なお鑁は金剛拳（縛）、金剛鎖、水天の場合にも用いられる。

(70)　不空訳『理趣経』は「悪引重呼」とする（大正八巻、七八四頁）。また『理趣釈』にはその解釈を示し、さらに毘盧遮那仏の真言を「嚩日羅二合駄都悪五字引」とする（大正一九巻、六一〇頁下、六一一頁上）。

(71)　頼富前掲書、五二四頁には、ラリタギリで発見された菩薩形の胎蔵大日と推定される石像に、namaḥ samantabuddhānāṃ aḥ vīra hūṃ khaṃ という胎蔵大日の真言が刻まれていることが報告されている。また大沢聖寛「漢訳密教経典の阿卑羅吽欠」（『勝又俊教博士古稀記念論集　大乗仏教から密教へ』所収、春秋社、昭和五六年）を参照。『秘密集会タントラ』には類似の aḥ khaṃ vīra hūṃ がある（cf. Yukei Matsunaga, *Guhyasamāja Tantra, A New Critical Edition*, Osaka 1978, p. 90）。詳しくは、酒井真典「大勤勇三摩地」（『酒井真典著作集』第一巻所収、法蔵館、昭和五八年）を参照。

(72) この外に oṃ を用いるものに『摂真実経』(大正一八巻、二七五頁下)、アバヤーカラグプタの Niṣpannayogavalī, no. 19 の金剛界曼荼羅 (cf. B. Bhattcharyya, *Niṣpannayogāvali*, G. O. S. series no. 54, text p. 47) などがある。その他のものについては、頼富前掲書、二八九、三六九頁を参照。

(73) 『金剛頂タントラ』では仏部 hūṃ、金剛部 hoṃ、宝部 traṃ、蓮華部 hriḥ、羯磨部 aḥ とする。しかし中央輪の毘盧遮那については明記されず、阿閦が hūṃ、阿弥陀が hriḥ、不空成就が kaṃ とされているにとどまっている (D.171b～178a ; P. 194a～201b)。ただしそれらの三仏の種字が各四親近(十六大菩薩)の第一菩薩の種字に対応することから、中央輪においては毘盧遮那が hūṃ、宝生が oṃ であった可能性がある。注(41)の酒井前掲論文を参照。なお『金剛頂タントラ』の後半部分には、仏は hūṃ, 金剛を有する者は hūṃ, 宝を有する者は oṃ, 蓮華を有する者は hri, 種々は a と説く (D.232b ; P.259b)。

(74) 『金剛出現』では毘盧遮那如来の真言として、oṃ sarvatathāgatamahayoiśvara hūṃ を用いる (D. 10b ; P. 12b)。これは Niṣpannayogavali でも用いられている(cf. bhattacharyya, *op. cit*, text p. 47)。これから考えると hūṃ を種字と見なしている可能性がある。しかしまた墨打ち法で青・黄・赤・緑・白の顔料に対し、梵文写本には、hūṃ, traḥ, hriḥ, aḥ, aḥ の種字によって阿閦仏等を布置することが記されているから、aḥ も考慮されている。注(30)の密教聖典研究会「同(Ⅱ)」§ 49を参照。ただし写本の traḥ が traḥ と校訂されている。なおチベット訳には hūṃ trāṃ (D. ; P. traṃ) hriḥ a oṃ とある(D.27a ; P. 31b)。

また五獣座を成就する種字として aḥ が存在することは前述したとうりである。なお『金剛出現』にもとづく Kriyasaṃgraha の本尊瑜伽では oṃ vajradhātu hūṃ と hūṃ もはっきりと出している。注(65)拙稿§ 94を参照。

(75) vaṃ は『瑜祇経』に普賢の一字真言として出ているのが知られている。また『金剛出現』には金剛吽迦羅に関連して hūṃ vaṃ hūṃ という真言が出ている (D. 28b ; P. 33b) のが、あるいはそれと関係あるかも知れない。しかしいずれにしてもその由来は不明である。『真実摂経』には金剛界品の四印会の五仏の真言の末尾に、毘盧遮那如来の場合に vaṃ とある。これはその真言の前文から判断して、金剛拳の縛を意味する種字であり、この vaṃ が用いられた可能性は推測の域を出ない。

(76) 注(73)を参照。

(77) 堀内校訂梵本、§§ 869-2, 873, 876, 879.

(78) 堀内校訂梵本、§§ 1494～1498.

(79) 堀内校訂梵本、§ 398.

(80) 注(73)に示した箇所、および後半部 (D.195a ; P. 221b) などを参照。

(81) 大正一八巻、二四二頁下。

(82) 大正一八巻、二五一頁中。

(83) 大正一八巻、二四〇頁中。

(84) cf. D. C. Bhattacharyya, The Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyika of Abhayakaraguptа, in *Tantric and Taoist Studies* I, edited by Michel Strickman, Bruxelles 1981, p. 85.

(85) Toh. no. 2531, Ku 306a ; Ota. no. 3354, Si 355b.

(86) 大正一八巻、二四八頁中。これも『金剛頂タントラ』に説かれている (Ota. no. 113, Na 184a)。注(41)酒井前掲論文参照。

(87) 注(25)高橋前掲論文を参照。

(88) 注(44)桜井前掲論文を参照。とくに『真実摂経』では入壇灌頂に当たって、弟子の器非器が問われなかったのに対し、『金剛頂タントラ』では同時に密教特有の律儀を説いて『真実摂経』の解釈に規制を与え

ていることは重要である。

(89)『略出経』に四種の洗浴法として「一には三律儀に住し、二には発露勧請し、三には契を以て供養し、四には水を以て洗浴す」と記すが、これも『金剛頂タントラ』に出ている（D. 200a ; P. 226b）。

(90)注(41)酒井前掲論文を参照。

(91)注(41)酒井前掲論文（『酒井真典著作集』第三巻）一三四頁。

(92)その可能性を考慮されているものに、松長有慶著『密教経典解説』（『現代密教講座』第二巻）一二六頁、北村太道「『Tantrārthāvatāra』を中心とした『金剛頂経』の研究（一）」三頁などがある。

(93)三崎良周著『台密の研究』（創文社、昭和六三年）一三九―一四〇頁。

(94)『金剛頂経開題』（弘全一輯、六九六、六九七頁）。

(95)堀内校訂梵本、§§ 32, 166, 169, 172, 175, 179, 182, 185, 188, 192 etc.

(96)堀内校訂梵本、§§ 1223~1227.

(97)大正一八巻、二五五頁下、二五六頁上。

(98)大正一八巻、二五七頁中。

(99)大正一八巻、二五八頁中。

(100)酒井真典著『大日経の成立に関する研究』（国書刊行会、第三刷、昭和五一年）二〇頁参照。

〈キーワード〉『金剛頂経』、『真実摂経』、『略出経』、『金剛頂タントラ』、金剛智

追記　脱稿後、本稿に先行する研究として、田中悠文氏の一連の論文が存在することに気づいた。その中でとくに本稿と関連する氏の論文として、「不空所伝の金剛頂瑜伽経について―金剛智三蔵所伝の金剛頂経に関する一考察―」（『智山学報』四〇、平成三年所収）があることを記しておきたい。